

茨城県守谷市の住宅街の一角にある「もりや小児科医院」には、地元だけでなく、県内各地から患者が訪れる。保護者の支持を集める理由はほかとは少し違っている。診療方針にある。

まず様子を見る

風邪をひいた子供は自然に治る。金子英哲院長

(57)は症状や所見から、肺炎や助産などの危険性がないと判断すると、付き添いの大人に「まず様子を見ましよう」と言って、帰せさせる。

高熱やせきに苦しむ子供の変容をみれば、早く治してあげたいと思つのが親心。

出づる国

「削りしろ」探せ ①

子供の風邪に

薬はいらない

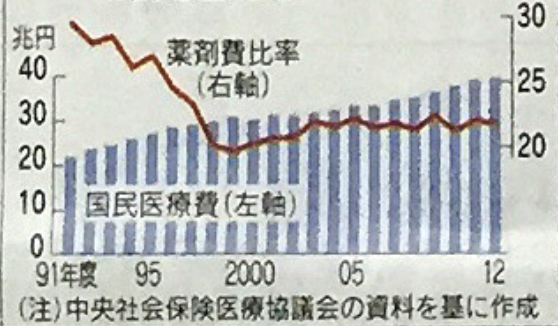
厚生労働省の資料によると、年間の薬剤費は約8・5兆円（2012年度）に上る。政府は医療費の伸びを抑える政策の一環で、価格の安い後発薬（ジェネリック医薬品）の普及率を今の4割台から8割に引き上げる目標を掲げた。だが、できることはまだありそうだ。少し注意を払ってみると、身の回りには「必要のない薬」が多い。

薬剤費 年8兆円

神奈川県横浜須賀市の男性(65)は在宅医療を受けながら複数の医療機関を「し」受診した。ケアマネジャーの依頼で、サン薬局(横浜市)の奈良健・在宅薬物治療支援部長(41)が自宅を訪ねると、机の上に大量の薬があり、押し入れの中からも見つかった。飲み残し減らす痛み止めを中心に全部で



薬剤費は国民医療費の2割を占める



海外に做った新たな動きも始まった。

米国で5年前に始まった「Choosing wisely (賢い選択)」。学会が中心となり、薬に限らず、検査や治療を含めた「ムダな医療」のリストをつくる取り組みで、風邪薬や高齢者の睡眠薬などを問題視している。

日本では小泉俊三・佐賀大名誉教授らが昨年、組織を立ち上げ、先月には医療の質・安全学会の中にワーキンググループができた。「今後、ほかの学会に参加を呼びかける」(地域医療

機能推進機構の徳田安春顧問)という。

病気を治すうえで薬が大きな力を発揮することはいいまでもない。だが、適切なタイミングで必要な量を飲んでこそ意味がある。ムダな薬を持っていても「お守り」にはならない。

在宅医療の発展や技術の高齢化とともに、医療費が膨らみ続けている。だれもが「医療のコスト」と真剣に向き合わなければならない時代が到来している。(関連記事を社会面に)

在宅医療の発展や技術の高齢化とともに、医療費が膨らみ続けている。だれもが「医療のコスト」と真剣に向き合わなければならない時代が到来している。(関連記事を社会面に)

電子版 費用対効果の考えを反映を
▼Web刊↓紙面連動